



笑顔の ひろば

vol. **41**

2018年 夏号

川崎協同病院
広報誌



<http://www.kawasaki-kyodo.jp>

医療型特定短期入所が併設型にリニューアル

「ぼっかぼか」の名称で親しみやすい事業所に

小児科の空床ベッドを利用し、主に医療ケアが必要な重症心身障害児・者を対象にした日中預かる（宿泊伴わない）医療型特定短期入所事業が、今年8月から専用の部屋を設け、併設型事業所としてスタートしました。温かみのある場所を目指して「ぼっかぼか」と名づけた部屋は、1階の小児科外来隣に位置します。

内装もやさしい色合いで



これまでは、空床利用だったため、定期利用を希望される人のベッドを確保するのが難しいことや臨時利用がしにくい状況がありました。また病室での預かりであるため、どうしても無機質な環境になってしまうため、特に子どもにとっては入院を連想し、家庭的な温かみを感じにくい環境にありました。

しかし、専用の部屋ができたことで、今後は生活の場としての環境づくりができるようになり、壁紙にイラストや明るい色を取り入れ、楽しい空間になっています。

これまではベッド上でしか過ごすことができなかったのが、フロアーを利用することでベッド上ではできない、みんなでの遊びもできるようになりました。今後は季節感のある行事やイベント企画なども行っていく方針です。また、小児科外来の隣に部屋を設けたことで、なにかあった際や相談事がある時に医師や看護師との連携もよりタイムリーにスムーズにできるようになりました。

ここにくると心がぼっかぼかする場所になってほしい、そんな願いをこめて名付けた「ぼっかぼか」。子どもにとっては楽しい遊びと大好きな友だちがいる場所。成人した利用者にとっては、自宅だけの生活ではない、地域社会とのつながりの場になることも目指しています。

心待ちにしていた専用の部屋

病院の中にあるけど、病院じゃない。家庭的な雰囲気の中で、利用者が、今日は楽しいと思える一日を過ごせる場所づくりを目指しています。病棟のベッド上でのお預かりではできなかった、集団あそびで友達と顔を見合わせながら笑い合う経験。音や光、香りを使い五感で楽しむ時間。季節の装飾や行事を取り入れ、全身で季節を感じることで心豊かに育ち、過ごしてほしいと願っています。

部屋のシンボルとなった樹の絵のように、利用者がすこやかに育ち、この地域に根付いた暮らしができるよう、「ぼっかぼか」も成長していきたいと思っています。



介護福祉士 藤田 ミチ

きめ細かな対応を心がけ

私たちの仕事は送迎から始まります。迎えに行った時、自宅での様子を家族からうかがい、その日の体調を把握します。「ぽっかぽか」の利用者は、言葉で気持ちを表すことが難しかったり環境の変化に敏感だったりする人も多いので、その日の表情や体温、呼吸状態などから体調に変化はないかなど、きめ細かく対応するようにしています。また、自宅での生活リズムになるべく近づけ、家庭的な雰囲気の中過ごせるようにつとめています。

当院では本人が体調不良の時もお預かりし、医師と相談しながらその日の過ごし方や、必要であれば検査や治療を行っています。家族の日々の悩みや困り事に気づき、共に考えていくことで“困った時のぽっかぽか”と言ってもらえるような関わりを目指していきたいです。



看護師 井上 陽都 はるか

18歳を超えても

小児科といえば、みなさん子どもを診ているとお考えでしょう。しかし、重い障害を抱えた方（以下重症児者）を対象にする場合はその限りではありません。当院の医療型短期入所は小児年齢の重症児はもちろんですが、18歳を超えた人にも利用していただいています。成人年齢になってくると

で今までとは異なる健康問題も発生してきます。当院では内科や外科系の先生からも知恵を借りて、重症児者も地域で健康に生活していける医療生協らしい医療型短期入所を目指しています。



小児科部長 高村 彰夫

笑顔のある診療を心がけて

～11年ぶりに帰ってきました～

消化器内科の野本朋宏です。初期研修と後期研修の5年間を協同病院で過ごし、その後昭和大学病院の消化器内科で膵・胆道疾患の内視鏡治療や抗がん剤治療を中心に消化器内科の専門として日々研鑽を積んできました。この度、副院長・消化器内科部長として戻ることになり、大変うれしく思っています。

消化器内科といえば、消化管出血、胆嚢炎、膵炎といった急性疾患やC型肝炎、肝硬変、炎症性腸疾患、便秘といった慢性疾患、そして胃がんや大腸がん、膵がんといった悪性疾患と多岐にわたる疾患を診ています。

最近では、胃がんの90%以上がヘリコバクター・ピロリの感染が関係していることが分かり、早期にピロリ菌の除菌を行うことで、胃がんの予防につながっています。そのためには胃カメラを使って、早期がんの発見だけでなく、ピロリ菌がいるかどうかを見ることが重要です。

また、生活習慣の欧米化もあり、大腸がんは増加しています。女性では、がんで亡くなる人の内、大腸が

川崎協同病院 消化器内科

副院長 野本 朋広

2001年昭和大学医学部卒業後、川崎協同病院で5年間研修し2007年昭和大学消化器内科に入局、2018年4月川崎協同病院副院長として再び勤務



んでなくなる人の数が増え、もっとも多くなりました。まずは健康診断で便潜血検査を行うことを勧めています。陽性でもその後の大腸カメラの受診率が低いことが問題になっています。

便潜血が陽性の場合、約1～3%に大腸がんが見つかります。当院では鎮痛剤の使用や二酸化炭素の使用でできるだけ苦痛なく検査が受けられるようにしていますので、便秘や血便、腹痛などの症状があれば、ぜひ外来で相談することを勧めています。

医師としての礎を築くことができた川崎協同病院で、大学病院で学んだ医療を提供しながら、地域のみなさんに貢献できるように、これからも笑顔でがんばります。

私が担当します！

物を持つと手が痛くなることはありませんか？

今年7月から川崎協同病院の整形外科科長に就任しました松井秀和です。これまでは大学医局関連病院で勤務をしてきました。また、大学では主に上肢の外科（肩～手指）を専門にしました。

みなさんは最近手の動きが悪くなったと感じることはありませんか。動きが悪くなると、今までは問題なくできていたこと、例えば服のボタンをかける、コップを持つ、箸を使うといった身の回りのことがなかなかできなくなってきます。

また、カバンを持ち上げたり、料理をしたりすると手首が痛くなることはありませんか。手の中には関節がたくさんあります。歳を重ねるにつれて関節の変形が生じたり、神経の流れが悪くなり、動かし難くなることがあ



川崎協同病院 整形外科
科長 松井 秀和

略歴：1998年北里大学医学部卒業後、慶應義塾大学病院整形外科に入局。その後、平塚市民病院、佐野厚生総合病院、小田原市立病院、済生会神奈川県病院、静岡市立清水病院、済生会横浜市東部病院、川崎市立井田病院と同大学医局関連病院を歴任、2018年7月から川崎協同病院勤務。

ります。転倒などによる骨折後の変形で関節の動きが悪くなることもあります。

そのような症状を放置しておくとも病状が徐々に悪化していく恐れがあります。些細な症状でも構いません。手のことでお困りがあれば遠慮なく整形外科を受診してください。

トピックス TOPICS

少しでも快適な環境で治療を 外来化学療法室が8月新設

外来化学療法室が8月から、外科外来の隣に専用の処置室として開設しました。これまでの外来化学療法は、中央処置室に隣接する部屋で行っていたため、救急対応の慌ただしさが伝わってくることもありましたが、移動して独立したことで、より静かな環境のもとで治療ができることになりました。

初回の抗がん剤治療は、治療の経過や副作用の傾向を観察するため入院で行います。その後、主治医が外来通院での治療が可能と判断した場合、外来化学療法室での治療になります。外来通院で治療をすすめていくことにより、日常生活や社会生活を継続することができ、経済的な負担も少なくなるというメリットがあります。

外来化学療法室は、抗がん剤による化学療法が必要な患者さんが、外来通院して治療を行う部屋です。外来化



淡いピンクでやさしい空間

学療法は、種類にもよりますが、長い場合は3時間程度の点滴治療になるため、新しい療法室では、治療中の患者さんが少しでも快適に過ごしてもらえるように配慮し専用の治療室としました。

また、やさしくゆったりとした雰囲気にも包まれるようにし、リクライニングチェアを2台設置しました。

中央処置室から離れたことによって静かになっただけでなく、より感染リスクも低くなりました。さらに、外科外来と隣接したことで、主治医と担当看護師の他に、外科外来にいる医師、看護師、事務のフォローもあり、患者さんが安全で安心して治療を受けられる空間となりました。

川崎協同病院 外来看護師長 塩入 美和



病院は地域との連携が何より大切。近隣の医療、福祉関係の施設や機関を訪問し、毎号紹介していきます。

第17回は「グループホームさくら」です。

(取材：地域連携室 山本結衣 高橋靖明)

自宅のような雰囲気にも **グループホームさくら**

「グループホームさくら」は、当院のすぐ隣にある桜本商店街の一角にあります。2階建ての1階がデイサービスで2階がグループホームになっています。訪ねると、玄関を開けたすぐのところで入居者の男性が洗濯をしていて、キッチンでは夕食の支度中らしく魚の煮つけのいい匂いがしてきました。とても温かい家庭的な雰囲気が伝わってきます。この日のメニューはカジキの煮つけと野菜炒めでした。

開所は2004年1月で、法人名を変えながらも今年で15年目を迎えます。入居の定員は9人。現在の入居者の平均年齢は80歳前半で、要介護1～2の人が多く、男女ほぼ半々ずつです。運営にあたっては、ホームは一人ひとりにとっての自宅である、ということ大切に、自然に過ごせる環境づくりを心掛けているそうです。

また、ケアに関してはなんでも手助けするのではなく、時間がかかっても本人がすることを見守り、できないところをケアするという自立支援を大切にしています。男性のある入居者は、以前は自分で家事をやっていなかったのが、ホーム内では洗濯や調理などを一緒にやっています。

日常生活以外では、敬老企画や、花見、忘年会、地域のまつりに出店したりといった季節行事などを行っています。また、外出行事を年1回行って、その際は入居者それぞれに希望を聞いて行き先を決めています。ときには、テレビで観てみんなが気に入った名所に行ったり、遠方の家族に会いに行くといったこともあります。個々の好みや希望に合わせた対応には驚きました。

外出の企画はバス移動ではなく公共交通機関を使うよ

グループホームとは

認知症高齢者グループホーム（認知症対応型共同生活介護）は、地域密着型サービスの一つで、認知症高齢者を対象に少人数で共同生活をする施設です。

入居するには、65歳以上、要支援2または要介護1以上の認知症患者である必要があります。

地域密着型サービスであることから、施設と同一地域内の住居と住民票があることが求められます。



桜本商店街の一角で開設から15年

うにして、実社会に触れる機会を作るようにしています。ホームでは今年度から月に1回、1階のスペースで子ども食堂を開催していますが、その受付や配膳を入居者も一緒に行っています。今後もこの取り組みを続けていき、子どもたちや地域との交流を続けていこうと考えています。

●川崎協同病院へひとこと・・・

入院をきっかけに状態が変化したりすることもあり、今後も連携していけたらと思っています。病状説明やカンファレンスなどで、声をかけてもらえるとうれい입니다。協力医療機関になってもらっているのでこれからもよろしくお願いします。

●おじゃまして・・・

かかわりの一つひとつが、自宅の生活の延長だということに心掛けて支援していることが伝わりました。帰りがけ入居者がスタッフと一緒に、漬物の盛り付けを均等に数を間違えないようにしている様子がほほえましく感じられました。

NPO 法人わい・わい

グループホームさくら

管理者 井上 和子

川崎市川崎区桜本1-9-11

044-299-3190

